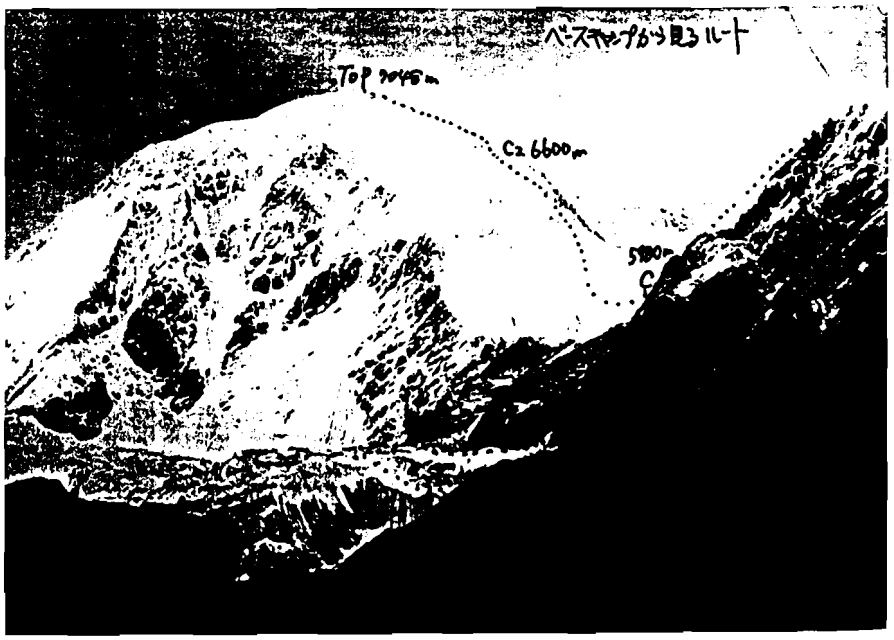
NO.28　1999.10.15
OSAKA CITY UNIVERSITY ALPINE CLUB

OCUAC NEWS

チョムカンリ（7048m）登頂記

武部秀夫

今夏のチベットも、モンスーンの影響が多々あった様子でした。チョムカンリ自体が、ヤルツァンポ川の北、ヒマラヤ山脈ではないニンチェンタングラ山脈にあることで（ニンチンカンサよりも100kmも北方にある）、モンスーンの影響はだいぶやわらいでいるものと思っていましたが、あいもかわらず、晴れた日は3日、ほとんどが雪とガスの日々でした。山自体もＢＣからいきなり氷壁、氷河プラトー、大雪壁、雪稜、それにＣ1まで6000mの三角ピークを一度登り、80m下降していくという、まったくもって総合力を駆使していくしんどいルートでした。Ｃ1～Ｃ2も40°～45°ある雪壁、氷壁、ミックス壁の連続で、休める場所がほとんどなく、気が抜けないルートでした。おそらく6800m～頂上までが本来一番ゆったりしたルートだと考えていましたが、アタック日もよい天気ではなく、ガスの中、視界に注意し、赤旗を30m間隔にぶちこんでの霧中登攀で、ＢＣ～すべて、しんどい山でした。登頂した3名は、頂上でつらさを思い出して泣いてしまいました。もうモンスーンの山はこりごりです。私自身、今回は3つめの7000m峰でしたが、一番つらい7000m峰でした。

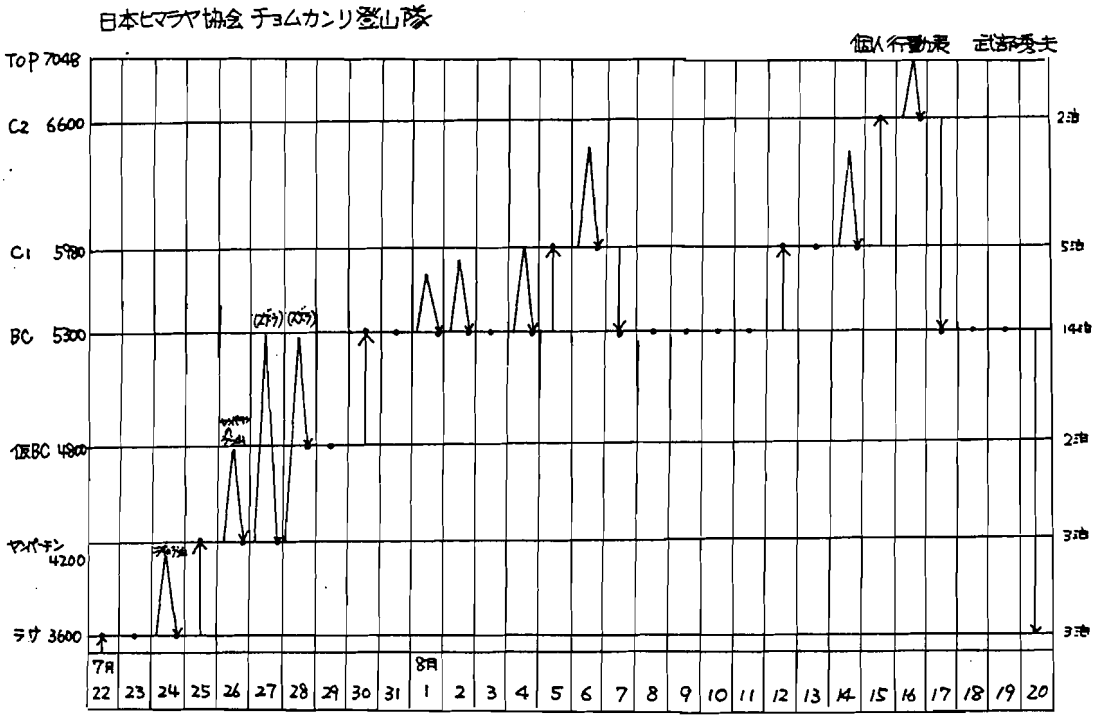


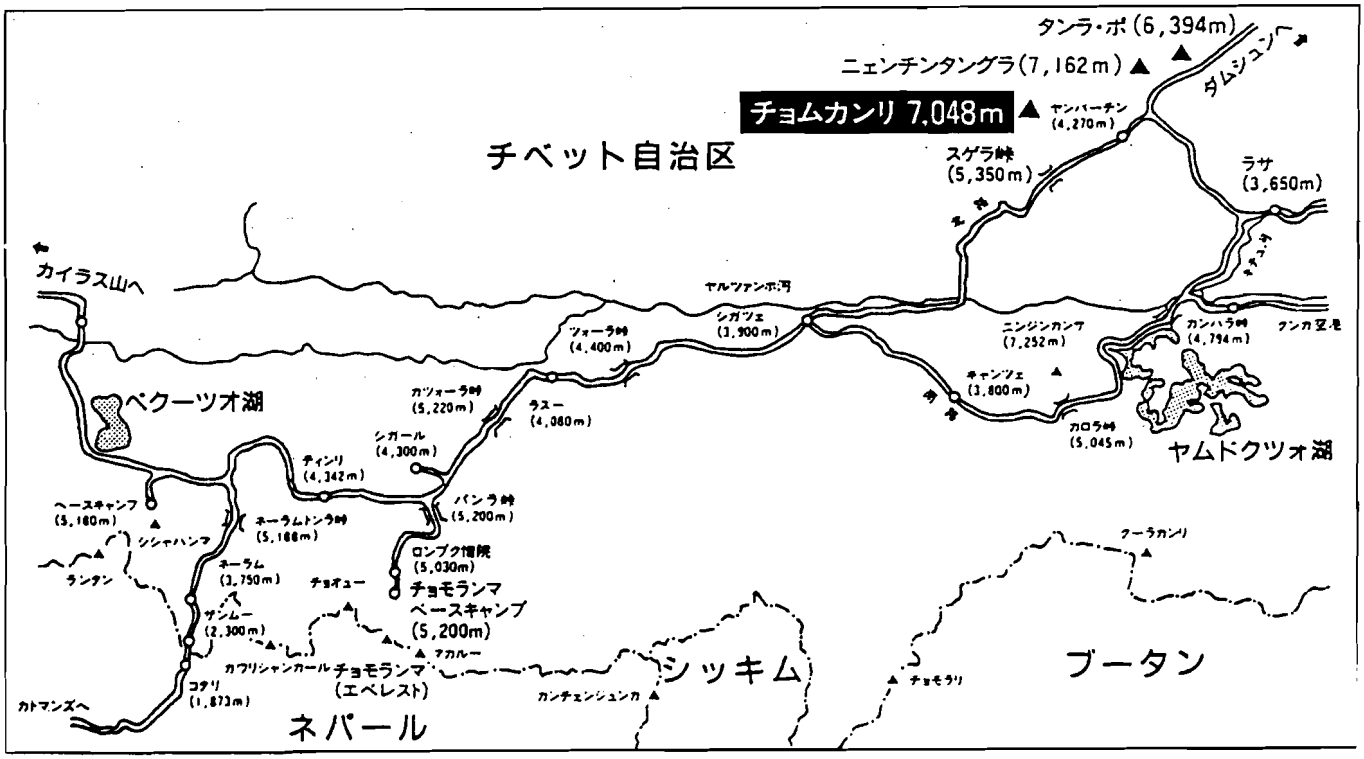
8月16日　Ｃ2起床5：30→Ｃ2出発8：00→チョムカンリ頂上12：40→Ｃ2着14：20

悪天候の中、体勢をたてなおして8月11日よりＣ1入り、ルート工作と荷上げ。降雪後は必ず南壁が表層ナダレのオンパレードになる。それにしても1週間がはやくたってしまった。昨日好天をつかまえて一挙にアタック隊の3名（佐藤副隊長、川崎くん、武部）とサポートの3名（石川登攀Ｌ、岩瀬くん、鈴木くん）で6600mにある岩峰基部にＣ2を設営。同時にＣ2上部の急峻な壁に4ピッチフィックスし、今日をむかえる。早朝目覚めると風雪、しかし、ガスがすこしきれていて視界は100m。Ｃ1にいる隊長と交信、Ｃ1からだと上部はガスの中だという。8時まで待機する。西方のタブラー峰6500mが見えてきたので天気はもつだろうと判断し、「いけるとこまで」ということで出発。フィックス終了点からはただひたすら雪壁をのぼる。赤旗を30m間隔で打っていく。ラッセルは膝ぐらい。雪質は安定しているのでこわくはない。11時、高度は6900m近い。ガスだが、100mの視界はある。頂稜部のゆるやかな曲線が近くに見えている。3人の登頂意志は固い。Ｃ1にいる隊長に佐藤

よりかけあってもらう。そして結論は「14 時までつっこむ」。ふらふらになりながらも帰りを考えて、ラッセル、赤旗さしの単調な作業は続く。交信後 1 時間、どうやら傾斜がおちてきた。頂稜の一角に出た様子。一番高いところをめざして進むこと 40 分。やっと頂上に着く。川崎、武部、佐藤の順に到った。ガスであいかわらず視界悪く、50m程度。頂上はただひたすら雪原状となっていた。12 時 40 分登頂。交信すると登頂できたことにきょとんとしている。というのもC1 付近まで南壁上を雪崩がオンパレード状態だとか。また同時に 2 次隊がC2 に上がれない旨の報告もあった。これで 1 チャンス。チョムカンリも終わった。ガスの頂上では 3 人、年甲斐もなく泣けてしまった。うれしさの涙ではなく、つらさのなぐさめの涙であった。

下りは速いもので赤旗たよりにどんどん下っていく。C2 に着くなり今度は安堵の笑みがあった。C2 に一泊して、雪崩に注意しながらみんながいるC1 に到ったのは翌日の 10：30、さらにC1 も撤収してＢＣに着いたのは 16：30、そこは緑あふれる天国であった。それしても気性の激しい女神であった。





日本ヒマラヤ協会　チョムカンリ（7048m）登山隊 1999　記録短信

①登山隊の概要

目的　・チベットのニンチェンタングラ山脈の第２高峰チョムカンリ峰（7048m）への登頂　通算３登目
　　・テイクインテイクアウトの実践

派遣母体と隊構成　・日本ヒマラヤ協会
　　・関根幸次隊長（わらじの仲間）以下全国から会員８名

遠征期間　1999.7.20～8.25（37 日間）

中国側スタッフ　連絡官　劉峰　36 才（♂）四川省登山協会勤務
　　通訳　趙玲玲　42 才（♀）中国登山協会
　　コック　曹さん　23 才（♂）チベット登山協会
　　その他ドライバーの方々（ジープ２台、トラック１台）はチベット登山協会

②登山隊の成果

・８月 16 日　12 時 40 分（北京時間）南壁から登頂（佐藤副隊長、武部、川崎の３名）。通算３登目
・隊でもちこんだものは分別回収。生ゴミ、可燃ゴミはＢＣへ下ろし、消却。その他はラサまで持ち帰る。
　フィックスロープは 12 ピッチ分 600mは回収。Ｃ1 から上部は回収できなかった。

③チョムカンリの登攀史

・山名は「女神の峰、知恵の目」と呼ばれ、チベット仏教ではマンジュシェリー（文殊菩薩）に相当すると言われる。
　ラサの北西約 113 ㎞にある。
・1994 秋　韓国隊による偵察
・1996 秋　中国韓国合同隊により南面から初登頂
・1997 春　日本中央大学隊により南壁から第２登
　・1999 夏　日本 HAJ 隊によりモンスーン期での南壁から登頂（第３登）

④日程

7/20　東京組５名は成田発、関西組３名は関空発で
　　北京前門飯店へ集合
　21　北京→成都
　　成都→ラサ
　23　チベット登山協会にて隊荷再梱包と食料品追加購入
　24　ラサ裏山 4000mの高度順化トレーニング
　25　ラサ→ヤンパーチン
　26　ヤンパーチン裏山 4500mの順化トレーニング
　27　スゲ・ラ（5300m）での高度順化トレーニング
　28　ヤンパーチン→ランドゥー村（4800m）仮ＢＣ
　30　仮ＢＣ→ＢＣ（5300m）ヤク 30 頭
8/4　南壁のコル（5980m）にＣ1 建設
　　ＢＣ～Ｃ1　13 ピッチ半フィックス
　15　南壁 6600mにＣ2 建設　Ｃ1～Ｃ2 21 ピッチ半フィックス同時にＣ2 上部４ピッチフィックス
　16　Ｃ2 8：00→登頂 12：00→Ｃ2 14：20
　　視界 100m風雪の頂上でした
　17　２次アタック中止　Ｃ2，Ｃ1 同時撤収　ＢＣへ下山
　20　ＢＣ→ラサ　ヤク 20 頭にて下山
　25　北京首都空港にて解散　東京行、関空行に分乗する

⑤チョムカンリ南壁クロニクル

ＢＣ　5300m

チョモ湖（氷河湖）のすぐ近くの平坦な草地に設営。韓国隊、中大隊のＡＢＣに相当する。下の村からここまでヤクによる荷上げ可能なため、この高度でのベースとする。ブルーポピーが点在していて楽園のようなところ。

Ｃ1　5980m

ＢＣから氷河左岸のモレーンをすすむ。2 時間でザレ場を登りきると氷河が全面出てくる。3 ピッチで氷河上のプラトーに出る。プラトー上をさらに 5 ピッチで三角ピークへの登りの雪壁になる。13 ピッチ半で三角ピークに着く。ここから下降１ピッチ半すると南壁のコル手前にＣ1 を設営。

Ｃ2　6600m

Ｃ1 から南壁を見ると「立っている」のがわかる。下部 8 ピッチは南壁核心部への緩傾斜帯、さらに 13 ピッチ半で岩峰（2 つ並んでいる）基部に着く。ここまで氷、雪、ミックス壁と 45°程度の傾斜となる。過去の 2 隊とも苦労した核心部。Ｃ2 は雪崩の危険も最も少ない地点である。

トップ　7048m

Ｃ2 左横の氷雪壁を直上、ここに４ピッチフィックス。これを登りきると頂上への雪壁が永遠に続く。頂稜部 6980 mぐらいからは傾斜が落ちる。一番高いところが頂上。雪の頂上。

カラコルム　トレック（1999.7.9～26）

小林　深

7月9～26日の間、山岳写真の会「白い峰」のカラコルム撮影トレックに参加してきました。山岳写真家・白籏史朗「世界わがこころの旅」のＮＨＫ取材班に同行しての旅でした。その時の印象を点描してみました。山岳写真撮影が目的のトレックでしたが、残念ながら天候に恵まれず決定的なシャッターチャンスを掴めませんでした。（「白い峰」は白籏史朗氏が主催する写真の会です）

7月9～10日　成田～イスラマバード～スカルド

北京を飛び立ち何時間過ぎただろう。夕日に鋭く光るすさまじい砂漠の荒涼が眼下に広がっていた。地図で辿ってみるとタクマラカン砂漠の上空を飛行していることになる。シルクロードと云うとロマンチックな響きしか聞こえないが、窓からの光景は地獄のような死の世界である。こんな所を歩けるとはとても思えない。スタインやヘデイン、大谷探検隊の記録を読んだことがあるが、その苦労が初めて実感的に想像出来た。キレン山脈、天山山脈が、緑の全くない山容の上に雪を戴いていた。緑の全く無い山は、何処か山らしくなく乾いた風景に見える。こんな風景をじっくり撮影できたらと思う。

イスラマバードからスカルドまでは天候次第という山岳飛行便、運良く好天で運行するという。空港を飛び立つと、20分程で山岳地帯に入り、私の乏しい語彙では到底表現できない凄さでナンガパルバットが眼下に迫ってきた。操縦席からの展望もサービスしてくれて、ヒマラヤ西端部とカラコルムの山々が広がり、それはもう土肝を抜かれるような凄い光景であった。緑の全くない下半身は灰色一色の山岳砂漠であり、その上半身は氷河と氷雪の世界、それが見渡す限り広がっている。生命の営みを一切拒否する壮絶な荒涼である。荒々しい絶対神、唯一の神「アラー」がその奥に潜んでいるような実感すら湧いてくる。そう言う感覚を伝えられる様な写真を、この旅でモノにしたいと思う。

7月11～15日　スカルド～フンザ～氷河トレック～ギルギット

スカルドからフンザまでの道中にインダス川とフンザ川の分岐点があったが、ここは地理学上の重要ポイントである。ここを基点にインダス川の東側がヒマラヤ山地、インダス川とフンザ川に挟まれた北部地域がカラコルム山地、フンザ川の西側がヒンズークシ山地である。いわば世界の屋根の中央点である。したがって、ナンガはヒマラヤ山脈に属することになる。

カラコルムハイウエーの光景は、山岳砂漠とインダスの流れだけで荒涼の一字に尽きる。道路は、落石や地盤崩れが随所にあり、補修が追いついていない。水のある所だけ緑があり村がある。全部、水路を作って上流から引いてきて作ったオアシスである。水さえあれば、太陽はふんだんにあり、植物にとっては天国である。村には決まってポプラの並木が植えてあり、杏やリンゴ、胡桃などが一杯植えられている。この辺のポプラは、わが国と違って竹のように細長く延びている。木陰で物憂げな男達がたむろしている姿が、何処へ行っても目に付いた。ハイウエー沿いには延々と、今は廃道になってしまった旧シルクロードが山腹にへばりついていた。その昔、三蔵法師が教典を求めてはるばる中国からやって来た道である。

フンザで2日間の氷河撮影トレックの出掛ける。ここのポーターはネパールと違って気性が荒く、ポーターとしての訓練もないので、用心するように注意を受けていたので一寸心配であったが、いざ歩き始めてみると、案に相違して善良そうであった。全部コーカソイド系で、長頭、高鼻、長身であるが、環境適応が進み皮膚は我々よりも濃い茶色である。老人は強烈な紫外線で顔は黒く焼け、深い皺を刻んでいるので特有の相貌に変わっているが、若者は白人と極めて良く似ている。彼らは1万年ほど前にコーカサス方面から砂漠を越え、パミール高原を越えてインダス川を南下して来た部族の末裔である。

広大なバルプ氷河のモレーン上でディラン（7266m）、スパンピーク（7027m）を撮影、朝夕とも焼けて素晴らしい条件であったが強風でカメラが小刻みに振動し、スローシャッターが切れなかった。バルプ氷河北面の尾根上からは360度の大展望、トリポール（7720m）、ルブガルサール（7200m）、ウルタル（7388m）、ラカポシ（7788m、デェラン、マルビデン（7200m）、スパンピーク等、カラコルムの盟主がぐるりと取り囲んでいた。残念ながら正午に近く、ピーカンのベタ光線であったが1時間ほど夢中で撮影する。

山に入ってしまうと、上空から見た時の、畏怖の念さえ覚えたあの壮絶な荒涼、唯一神「アラー」が潜んでいるような感覚は全く消え失せてしまい、何か物足りない感慨が残った。ああ云う感覚は、何処でどうすれば撮れるのだろう。

7月16～19日　　ギルギット～ブナール～ナンガパルバットＢＣ

デアミール谷の入り口であるブナールに着くと何処からともなく男達が集まってきて、辺りの雰囲気が異様になる。その内口論から大喧嘩に発展、少数派らしき集団に棒を持って襲い掛かり、大きな石をぶっつけるなどの大乱闘になった。石がまともに当たれば怪我くらいでは済まないような激しさである。危ないので暫く車を遠くへ移動して収まるのを待つ。ポーターの仕事の取り合いで、グループ間で喧嘩を始めたのであった。現金収入が殆どないため、ポーターの仕事にありつけるかどうかは彼らにとっては大問題なのである。喧嘩があまりに激しいので、こんな連中をポーターに使って上手くトレックできるのだろうかと云う不安がよぎる。喧嘩が収まり、ポーターを雇い入れるまでに熱暑の中で2時間近く待たされた。気温は43度を越えていた。

デアミール谷は、村沿いに木陰もあり、朝は気温も30度以下で調子よく歩いていたが、その内、山に入り急坂になるに従い、気温はぐんぐん上昇、炎天になってしまう。昼頃には42度にもなりもう熱射病そのもので、意志もなく惰性で朦朧と足を動かしているだけの状態になる。座り込むと、歩く意志が全くなくなってしまう。昼食も殆ど受け付けず、オイルサーデンのカンヅメの臭いにむかついてしまう。ザンコットのキャンプ地に到着した途端、皆倒れ込んでしまって口もきけない状態であった。砂漠のシルクロードを歩くと云うことは、こう云うことなのだろうと想像する。

ＢＣでは、先行していた取材班と白旗先生が待っていた。10年ほど前に先生が撮られた高山植物が咲き乱れるナンガパルバットの写真風景を期待していたが、現実は牛や羊の放牧場と化した糞だらけの食い荒らされた草地であった。大変な変わり様である。午後、ガスがどんどん増え始め、ナンガは全く見えなくなってしまう。期待していたナンガの夕景は撮影出来ずに暮れてしまう。ＮＨＫもこれでは素晴らしいナンガを放映出来ないだろう。

夜、ポーター達が時折射し込む月明かりの中で焚き火を囲み、ナンガの黒い山影を背景にポリタンクを太鼓代わりに叩いて歌い踊り始めた。取材班が早速撮影を始める。それは、素晴らしい一幅の絵になっていた。

7月20～23日　ＢＣ滞在～下山

着いた夜から雨がテントを叩き始めた。余程精進が悪いのか、以後ずっと雨が続く。写真目的のトレックにとっては最悪の気象となってしまう。雨の間に僅かの時間を花の撮影に精を出すしか仕方が無くなる。とは言え、時々ナンガがちらりと姿を現すので油断が出来ない。エーデルワイスの大株がそこここに見つかる。

下の放牧部落で衝突があり、1人死亡したとの報が入る。良く聞くと、グループ間の勢力の均衡が重要で、一人でも増えると何かの折りにやっつけてしまうそうである。何とも物騒な地帯である。

結局、ＢＣ滞在の4日間、ナンガは殆ど顔を出さず、朝夕の撮影ゴールデンタイムは全部空振りという結果に終わってしまった。しかし、ＢＣの北側に聳える無名峰に程良く斜光が射し、ガスの切れ目にきらりと輝くシーンを偶然撮ることが出来たのが慰めであった。

取材班に1日遅れて下山の途中、振り向くと綺麗に晴れ上がった空にナンガが光っていた。何とも皮肉なことに、我々が入っている時だけ天気が悪かったようである。折角なのでせめてもと、作品にならないことは承知の上で、独り三脚を狭い山道に据えて撮影を試みる。

ハルラで迎えのジープを待つ間、片言英語の出来るポーターの青年がいたので話していたら、イスラマバードの2年制の大学で一般教養を勉強したと云う。将来はガイドに成るのが目的と云っていた。大学を出たインテリは、イスラムの礼拝もしなく、民族服も着ず、髭も伸ばさないとのことであった。そうした若者が徐々に増えつつあるらしい。いずれイスラム社会も大きく変わって行くことだろうと思った。

7月24～26日　イスラマバード～ガンダーラ

イスラマバードまで475ｋｍ、アッショカ王の時代の仏教遺跡を数カ所訪ねながらの13時間の車の旅であった。

イスラマバードに入る道はアジア・ハイウエー、シン

ガポールからイスタンブールに通づる大動脈である。イスタンブールまで撮影旅行が出来たら素晴らしいだろうと思う。

イスラマバードではガンダーラの遺跡を見物に出掛ける。博物館に展示されている仏像は何れも 2～5 世紀頃のもので、それ以上古いものはない。アレキサンダーがやって来たのは紀元前 3 世紀、仏教がこの辺りにやって来るまでに数世紀の時差があった筈だ。ギリシャ風の影響が素人にも直ぐ分かる。

考えてみると、この一帯はギリシャ人と同じコーカソイドの世界、即ち白人の世界である。古代ギリシャの彫像がそのまま受け入れられるのには何の抵抗も無かった筈である。モンゴロイドの世界にコーカソイド風の彫刻芸術がやって来たのではない。その後に仏教がこの地に伝搬してきた。信者は皆コーカソイドであるから、ギリシャ風の仏像が生まれたのは当たり前のことであったのである。その辺のことを私は完全に誤解していた事に気が付いた。

2 世紀頃のものと言われる僧院の跡、都市の跡などを見物、古代へ思いを馳せた。遺跡で見る古代都市は規模が小さい。この程度の規模が標準であるとすると、アレキサンダーやチンギスハーンの大軍が侵入して来たら、何の抵抗もなく征服されてしまうのは明らかである。そう言う意味で見ると、歴史に残る大制覇もそれ程難しい事ではなかったのでなかろうか。大軍でなくても軍事技術が大きく進んでいるだけで簡単に征服できてしまうだろう。近世に於いても、インカ帝国がスペインの極く僅かの軍隊で簡単に潰れてしまった例がある。古代ギリシャは、当時世界を圧倒する超先進国であった。アレキサンダーは、抵抗らしい抵抗を殆ど受けずにここまでやって来たのだろう。

夕刻、イスラマバードに帰り、帰国の途につく。撮影は今一つであったが、ネパール以上に強い印象が残った旅であった。

整形外科 Dr.のひとりごと

『歩くってほんとうに体にいいのかな？』

田中博之

ぼくは学生時代はおよそまじめな山岳部員とはいえませんでしたが、その反動か、いまでも沢登りや山スキーにうつつを抜かしております。山登りの基本は歩くこと、それで歩くことの医学的効用にはいささか興味を持っています。わが専門外の内科領域では、糖尿病、高血圧、高脂血症といったいわゆる生活習慣病の予防や治療に歩けばいいですよ、と力説する書物は山のようにあります。わが専門に多少関係のある骨粗鬆症にも効果は期待できます。では、わが専門の整形外科領域を代表するいわゆる「おとしのせい」の腰痛、膝痛はどうか。不勉強のせいか、これらに歩くことを勧める報告は皆無です。運動はお勧めですが、非荷重の運動をしなさいということになっています。要するに浮力を利用できる水中での運動、あるいは寝たり座ったままできる運動がいいわけです。確かに旅行やショッピングで痛みが悪化する人は多い。以前、わが山岳会の池田先輩にお願いして中高年登山者の膝痛について調査させていただきましたところ、実に 65.3%の人が登山中に膝痛を経験していました。どうも整形外科的な疾患には原則的には歩くことはよくないようです。

しかし、患者さんの中には「歩くと楽ですわ」という人もいます。確かにぼく自身も軽い腰痛が歩くことで治ってしまった経験があります。ウオーキングの効用についてのアンケート調査などでは腰痛、膝痛、肩こりなどがよくなったという意見がけっこう見られます。

では歩くことで「おとしのせい」の腰痛、膝痛が予防できるでしょうか。いろいろ調べてみてもはっきりとはわかりません。そこで自分自身で検討しています。通勤で５ｋｍほど歩き、エレベーターはいっさい使わない、時々けっこう過激な山に行くということで、よく歩く群に属しているつもりになっています。歩いていて、自動車、バイクに抜かれて排気ガスを浴びせられるのが悔しいですが、今のところ腰痛、膝痛の経験はごくまれです。現在 42 才なので実際の問題はこれからですが、山岳会のみなさまの御経験などを教えていただければ幸いです。

アルプス合宿　1999

1999 年の夏は、前半のグリンデルワルトに４名が、後半のツエルマットにはさらに２名が加わっての 6 名が集う『アルプス大合宿』となりました。平均年齢≒61 歳。未だ衰えの来ないアルコールを大いに嗜みながら、皆それぞれの楽しみを思う存分に堪能して参りました。

スイスは物価が高いと言われておりますが、確かに、外食した場合などにはその通りだと思います。しかし、スーパーに並ぶ食材は、魚類を除いて、種類も多く新鮮で、価格も日本に比べればはるかに安いと言えます。したがいまして、キャンプ場の利用あるいはキッチン付きの部屋を借り上げての自炊による滞在は、かなりの労働力を必要としますが、日本よりもコストパフォーマンスは高いと言えそうです。

今夏は、各種の料理に詳しい光子夫人の用意周到な食材の手配と、さらにはお心籠もりの調理のお陰により、豊かな食生活と日々の潤いを、美しい風光と共に満喫して参りました。

（文責　小笹孝）

メンバー：藤本夫妻、小笹、長谷川、佐々木、中島康昌（藤本友人）

先発隊一人当たりの費用概算：

Sfr 払い　1Sfr≒¥80　(1999.7 月)		国内円払い	
交通費	465	航空券	108,000
宿泊費	512	スイスカード	20,500
（テント 19 泊 199　ホテル 2 泊 240　小屋 1 泊 73）		食　料	10,000
外食費	182（昼 3 回 74　夜 2 回 108）		計　¥38,000
食料費	222（約 19 日分）		
燃料費	33		
酒　類	126		
ガイド料	530（小屋 2 泊分を含む）		
	計　Sfr2,070（約 16 万円）		

行動概要：

			（宿泊地）
7/21	晴	藤本夫妻、中島、小笹　関空より出発	機内
7/22	曇	チューリッヒよりルツェルン経由グリンデルワルトへ	ベラリー
7/23	曇	ブスアルプ→ファールホルン→バッハアルプ	ベラリー
7/24	晴	キャンプ場『氷河村』へ移動	キャンプ場
7/25	晴	上グリンデルワルト氷河の谷をグレックシュタイン小屋手前まで	キャンプ場
7/26	快晴	ユングフラウヨッホ→コンコルディア	コンコルディア小屋
7/27	晴→雨	コンコルディア→グリュンホルンリュッケ→フィンステラーホルン小屋	小屋
7/28	雨→曇	小屋→ゲムズリュッケ→オーベラールヨッホ→グリムゼル	キャンプ場
7/29	晴	休養日　3 日間同行したブレーザー家の招待	キャンプ場
7/30	晴一時霰	藤本・小笹　メンヒ（頂上直下 50m迄）	キャンプ場
		中島・光子　アイガートレイル	キャンプ場
7/31	曇	ラウターブルネン→トリュンメルバッハ→ミューレン	キャンプ場
8/1	晴一時雨雷	下グリンデルワルト氷河の谷をシュティーレッグ上方 2100mまで	キャンプ場
8/2	曇	ツエルマットへ移動	キャンプ場
8/3	曇時々晴	休養日	キャンプ場
8/4	曇	ブライトホルン　4 人全員頂上まで	キャンプ場
8/5	晴→曇	ゴルナーグラート→リッフェルアルプ	キャンプ場
8/6	晴→雨	長谷川、佐々木合流	キャンプ場

8/7	晴→曇	シュワルツゼー→ヘルンリ小屋	ヘルンリ小屋
8/8	雷雨→曇	ヘルンリ小屋→シュワルツゼー	キャンプ場
8/9	晴強風	小笹・佐々木　クライネマッターホルン→フェリクヨッホ	フェリクヨッホ
		他全員　ブライトホルンパスまで	ツエルマットCS
8/10	曇一時雷→晴	小笹・佐々木　沈殿	フェリクヨッホ
		他全員　シュトックホルン	ツエルマットCS
8/11	晴	小笹・佐々木　リスカム→クライネマッターホルン	キャンプ場
8/12	雨	佐々木　メッテルホルン	キャンプ場
		他全員　トリフトホテル	キャンプ場
8/13	晴	シュワルツゼー散策の後、長谷川はアムスへ	キャンプ場
8/14	晴→一時雨	スネガ経由ウンターロートホルン	キャンプ場
8/15	曇	中島・小笹・佐々木　チューリッヒより	機内
		藤本夫妻　シャモニーへ移動	シャモニー
8/16		関空へ無事帰着	

8 グリンデルワルトにて

藤本　勇

メンバーは 3 年連続の小笹君、高校時代の山友達の中島君、元気印の女房と小生の４人。

7 月 22 日にスイスのチューリッヒ空港に早朝着き。午後には最初の目的地であるグリンデルワルトに到着する。

23 日は時差ボケ解消のために、バスでブスアルプまで行き、曇天の中ファールホルンの頂上まで登る。今年は雪が多かったのかして、標高 2000m以上の地点で残雪が豊富であった。帰りはバッハアルプゼを経て下山。天気が良ければここからの展望は最高らしいが残念ながらガスの中で山は見えない。しかし、高山植物の咲き乱れた池のほとりでアルプホルンの笛の音が聞こえてくる。まさにスイスアルプスのまっただ中にいた。

24 日。今日はプフィンシュテークへのリフト乗り場の下にあるキャンプ場へ移動した。キャンプ場からはアイガーのミッテルレギの稜線、下の氷河が目の前にあって最高の場所。

午後、フィルストまでリストで登る。50 以上のパラグライダーが中空に舞う。色とりどりのパラグライダー。俺もやりたいなあー。

25 日。リフトに乗って対岸のプフィンシュテークへ。山腹を巻いているとき、突然人間の頭くらいの落石が体の近くを通る。明日からの氷河歩きのため無理をせずに、グレックシュタイン小屋の手前で氷河を見物しながら引き返す。

26 日。ユングフラウヨッホの駅は地下の中、プラットホームが上下 2 階になっている。ユングフラウ側の出口に出るといろいろな国からの観光客で展望台は人、人、人。

今日から 3 日間ガイドに連れられて氷河歩きをする。ガイドが午後１時半ころ現れ、スイス人の家族３人も我々と同行する。先行のパーティー 10 数名ばかりが氷河を下っている。私達もガイドの指導でアイゼンを付け、アンザイレンしてコンコルディア目指して下る。天気は快晴。四囲の景観は素晴らしい。山スキーの人が氷河を下っていく。氷河の中に急流があり、女房が飛び越そうとしたが足場が崩れて片足を濡らす。

コンコルデイアまでは傾斜の殆どない斜面を 5 キロほど歩いた。コンコルディアはおよそ 2 キロ四方に広がった十字路。氷河からはスリル満点の階段を 100mほど登ると崖の上にヒュッテは建っていた。すごく高度感有り。小笹君の調べでは 385 段あったとのこと。100 年前にはこのヒュッテの近くまで氷河があったと思うと地球温暖化による氷河の後退の凄さが分かる。

スイスの夜は長い。10 時頃にやっと真っ暗になった。ヨッホからヒュッテまで約３時間半。

27 日。昨日の階段を下って氷河に出る。全員、アイゼンをつけてザイルに結ばれる。勿論トップはガイド。氷河の上にいろいろな大きさの岩があった。恐らく右岸の山からの落石だろう。ガイドはひたすら休憩なしに登る。周囲の景色は素晴らしく、雪と岩と氷の世界だ。3 時間でグリュンホルンリュッケの峠についた。峠からは小笹君と登る予定のフィンステールホルンの雄姿が飛び込んできた。格好のいい山だ。登るルートを目に焼き付

けながら氷河を下る。峠から 1 時間半でフィンステールホルン小屋に着いた。昨日のコンコルディアよりも快適な小屋である。午前中は快晴であったが、夕方から天気がくずれ、雨となる。

28 日。夜来の雨がやまず。ガイドが出発を遅らす。今日は 8－9 時間ほど歩かねばならない。小屋からは氷河に降りずに右岸沿いにガレ場をトラバース気味に歩く。やがて左上に登るルンゼに取り付く。途中 40 度くらいの斜面を慎重に登る。峠はゲムズリュッケ(3280m)という名前がつけられていた。今回のコースで一番標高の高い地点である。峠からは目の前の氷河をまっすぐに下る。雨も上がったようだ。オーベーラールヨッホの小屋下で大休止。ガイドが小屋の電話を使ってタクシーの手配をやってくれた。地図で見ても長いオーベーラール氷河を下る。下るにつれてガスも切れてきて見通しが良くなってきた。赤い氷河、風で運ばれてきた赤い花粉?が氷河の上につき、雨で流されてシマ模様になっていた。氷河の末端にはダムがあった。

3 日間の氷河歩きを無事に終えた。3つの峠を越し、30 キロの氷河を歩いた。

29 日。一日休養日。氷河歩きで一緒だったスイス人の家族から夕食を招待される。

30 日。小笹君とメンヒへ。中島君と光子はアイガートレイルをハイキング。

朝一番の登山電車でユングフラウヨッホへ。メンヒヨッホへの平坦な道を歩き、メンヒの尾根の末端でアンザイレンする。登り出したのが 10 時 20 分。最初は簡単な岩登り、雪稜が出てきてアイゼンをつける。既に 3－4 パーティーが尾根に取り付いていた。登頂した 2 人組の下山者に出会う。岩場を過ぎると急なナイフリッジとなる。4000m近くになるとスピードが一段と遅くなる。脚力の衰えが目立つ。天気は快晴で展望は最高であった。12 時をすぎると雪が腐り始めてグサグサ。あと標高差にして 5－60mの頂上下のトラバース地点で断念して引き返すことになった。登り出して 3 時間のアルバイト。ヨーロッパアルプスの山登りは早朝の間に登り、雪が腐り始めるころには安全な所まで降りてくるのが定石だ。やはり、昨夜はメンヒヨッホの小屋に宿泊すれば良かったのにと後悔した。引き返し点より尾根の取り付き地点まで、下山に 3 時間 20 分を要す。

31 日。全員でミューレンへ行く。途中でトリュンメルバッハの滝を見物しリフトを 2 回乗り継いでミューレンの街に登る。こんな高い場所に静かな街があるとは信じられない。スイスはあまりにも整備された国で、どこを取っても感心するばかりだ。

8 月 1 日。毎日、テント場より朝夕仰ぎ見ていた前の氷河を登る。多くの登山者が歩いていた。氷河のアイスフォールを見ながら、のんびりと長い休憩を取った。羊の群、鈴の音、ネパールの山を思い出す。
今日はスイス建国記念日。近くの山々から松明が灯り花火が上がる。グリンデルワルトでの生活も今日で終わりだ。明日からはツエルマットでのテント生活が待っている。

《シュバルツゼーからヘルンリ小屋》　長谷川ふみ子

「早朝の景色が最高のヘルンリ小屋へ行きましょう」優しく声を掛けていただいてテント場出発。歩くこと 20 分でシュルーマッテン駅。クラインマッターホルンへ行くのと同じゴンドラでフーリーへ、そこでフルック行きに乗り、更にシュバルツゼー行きに乗り換えてテント場から約 1 時間でシュバルツゼーに着く（冬のスキーシーズンはフーリーから直接シュバルツゼー）。

さすがドイツ語が多いが、フランス語も時々聞こえて来る。適当に挨拶をしながらいい気分で快適な登り。結構いけるじゃないかとルンルン気分。1 時間半ぐらい経った頃だろうか。「レストラン＆ヒュッテ・ヘルンリ」の赤い四角い立て看板。このころには仲間は遙か上の方。

日帰り客らしいフランス人の会話。「遠いのかな」「そんなこと無いだろう」「じゃ行くか！」。これにすっかり騙されて、すぐ其処のように錯覚。行けども行けども小屋らしきものは一向に見えず、だんだん道も体もきつくなる。

旦那に大きい荷物を持たせ自分は水着姿に近いイタリア人の奥さんと私、交互に休みながら歩いている内に言葉は殆ど通じないのにすっかり意気投合。

所々ザイルがフィックスされていたり、金網のようになった鉄板で登山道が確保されている。佐々木さんの云

われる 3mの舗装道路はオーバーだが、道はしっかりついているし登山客も多い。迷う心配は全くない。「トレーニング・ゼロの上に、つい最近心臓に問題ありの結果が出た」と、「どうして山に来たのだ」と云われそうな話をして置いたので、少々の遅れは許して貰えるかと、全くの自分のペース。特に小屋直下の 42 回（ガイドブックによる）のジグザグの登りはきつかった。

「今日はヘルンリ小屋泊まり」というのが救いで、みんなに迷惑を掛けずに済むのが有り難かった。こんなにゆっくりでもガイドブックに出ている登り 2 時間半に納まったようだ。

ヘルンリ小屋前のテラス。溢れんばかりの人。雲一つなく真っ青に晴れ、目の前には山！山！山。小屋を背にして向かって右から、何年か前、私がその横をイタリアのチェルヴィニアへスキーで降りていったクラインマッターホルン。藤本夫妻、中島さんが今回小笹名ガイドのもと登られたブライトホルン。佐々木、小笹両氏が登攀を予定しておられるリスカム。その向こうにモンテローザ。更にシュトラールホルン、リンプフィシュホルン、アラリンホルン、アルプフーベル、テッシュ、ドムと続く（小笹名ガイドの指導による）。どれもこれも全部カメラに収めたい素晴らしい景色に、そこに居合わせた全員至福の時を思い切り満喫した。

チェックインまでの時間、ダイニングで。登攀を終えた人とガイドのあつい握手。

97 年には我々の仲間が此処でこの感激の一時を過ごしたのだ。その場面に一緒にいたかったなと、胸が熱くなる。

この小屋で困ったことは「水不足のため」との張り紙で、トイレの水以外洗面の水が一切出なかったこと。小屋の横にテント場があるが雪渓までは距離があり、水の確保が大変だろうと思われる。小屋の外のトイレもテラスの客が下山したと見るやすぐ鍵をして使用禁止。水不足の深刻さが伺える。

「翌朝上に登らない人」と言うことで 4 階の静かな部屋に案内される。少し物足りない。出発組の朝食（4 時）に合わせて、目覚ましをセット。せめて出発時の緊張した雰囲気だけでもちょっぴり味わいたいと…。あいにく夜中に大雨。雷も。

4 時のダイニング。人影無し。一瞬後れをとったかと外に飛び出す。一面の霧。

悪天候でキャンセルになった模様。マッターホルンの岩壁に張り付いた蚤のようなライトの行列を一目見たかったのに残念。それ以上に登ろうとしていた人はどんなにか無念だっただろう。

昨日とはうって変わって何も見えない。雨の中の下山かと雨具を整えている内に徐々に回復。やはり下りは楽だ。1 時間少々でシュバルツゼーに。

昨日は登りを前にして、シュバルツゼーの湖やその傍らに佇むチャペルなどに目をやる気持の余裕もなかったが、ヘルンリ小屋へのノルマを果たして気分も晴れやかに近づいて中に。幸い日曜日でドアが開いていた。鄙びた、こぢんまりした味わいのあるチャペル。朝から何かセレモニーがあったのか綺麗に花が飾られている。もう一度チャンスがあるなら、こんな所もいいな…なんて。でも牧師さんはどこから来てくれるのかな。

すっかり晴れて楽しいランチを食し全員満足。

《テント生活と雑感》

今回のツエルマットで是非やってみたかったことは、学生時代以来四捨五入 40 年ぶりのテント生活をもう一度やってみること。もう一つはヨーロッパのスキー場などでよく見かける「何時間も双眼鏡を手に、又は目を閉じたり、じっと何もしないで周りの景色にとけ込んでいるかのように見える女の人」をやってみることの 2 つ。「日本人は寸時を惜しんでちょこまか動きすぎる。テント場か展望台のテラスで半日ぐらい本を読むなり、一点を見つめるなり、一度でいいから日本人らしくないことをやってみたい。」と言うのが私の長年の憧れ。

テント生活は素晴らしいメンバーに恵まれて最高！名シェフ光子さんのもと食事は美味しいし、ワインは安いし、シーバスタイムの楽しい語らい、何と深夜の星座観察や、皆既日食のおまけまで付いて期待以上のものだった。 独り寝のテントの緊張感も快かった。それに雨が降っても中が濡れないし、稲光を中から安心して鑑賞できるテントなんて凄い。時代は変わったのだとつくづく思った。

「周りの景色にとけ込んだように身動きしない女の人」は残念ながら今回も見送り、次回に譲ることになった。

8 リスカムの端っこに　　小笹孝

学生時代からスタミナにそれほどの自信が有ったわけでもない私には、山登りも四捨五入で 60 歳が限界ではないかと、再開する時から思っておりました。それが 2 年しか残っていないと思うと若干の焦りを感じます。懐具合も考えて、登りたい山の整理をしたうえで確実な消化を図らねば、と感じております。

膝が本調子になったら岩登りのマネゴトもしたいと思っていますのに、なかなかそれも儘なりません。果たして後 2 年、もつかどうかも判りませんが、行きたい山へ、登れる時に、と願っております。

リスカムは、それぞれ頂上群を持って大きく広がるモンテローザとブライトホルンの間に在って、一段と量感あふれる姿で、多くのハイカーや観光客をゴルナー氷河越しに楽しませてくれております。また、その北面は、グレンツ氷河の上に屹立すること 1,000m、クライマーの瞳を惹きつけて余すところがありません。

そんな姿を見上げた時から何故かガイドレスで越えたいものだと思っていた厚かましい私に、国外経験豊かな佐々木君が同調してくれ、今回の山行となりました。

リスカムを越えるのに、東からとするか西からとするかの議論はささやかながら有りました。その際、アプローチにイタリア側を利用することはインフォメーションの不足により当初から除外されており、小屋の利用もイタリア側は検討外のことでした。
結論は西側からです。理由は将に出発点の標高に在りました。

出発点　東＝モンテローザ小屋　≒2800m
　　西＝クライネマッターホルン駅　≒3800m

両者の高度差 1000m。「この差はしんどいでー」となりました。そのうえ、スイス側の小屋だけを利用しての行動には相当な無理が予想されることに起因して、テントを担ぎあげる計画になったことからも、この高度差は物を言いました。

8 月 9 日　晴のち曇一時雷　終日強風
クライネマッターホルン駅 8：50－10：50 ボリュックス南西岩稜末端 11：00－14：30 フェリクヨッホ（テント泊）

ブライトホルンパスまでも皆様のお見送りをわざわざ頂いて勇躍出発したわけですが、ウオルターの注意が忽ち現実となって現れてきました。昨年、アイガーのミッテルレギ稜を楽しくリードしてくれたウオルターとクライネマッターホルン駅でラッキーにも邂逅し、束の間の再会を懐かしんだその際に、「リスカムは今日は非常に風が強いゾ」と、注意してくれていたのです。

カストールの登りにかかる頃には全く厳しくなり、しばしば立ち止まっては耐風姿勢で強風をやり過ごさねばならない状況で、頂上直下のナイフリッジは短いながらも気色の良いものではありません。

漸くフェリクヨッホに着いたものの、設営位置の雪を踏み固めながらも無事に張れるかが心配でした。ともかく、吊下げタイプの二人用テントを風の方向に合わせて広げ、風上側を一人が全身で押さえ込み、それと同時にザックを中に放り込んで、忽ちには吹き飛ばされない段取りを取ったうえで、ようやくテントを起こし、次いで四隅のペグを固定、最後にポール中段の張り綱を設置しての設営完了に小一時間も要していました。

風に倒されないためには絶対に必要な頂部の張り綱を、風の向きも強さも絶えず変化する中で適切な長さにセットする作業は、まだ他の一切が固定されていない段階での作業となるだけに随分と骨が折れるものでした。もう喉もカラカラ。林檎囓りたいなー。

折角差し入れてもらった林檎を、身支度が終わったらザックに入れようとしていた矢先に風に持っていかれてしまった出発時の油断が悔やまれました。

8 月 10 日　嵐一時雹のち晴　沈殿

昨夜はイタリア側から一晩中吹き荒れ、宵のうちは雷が、明け方近くには雹が叩きつけて、地吹雪と共に騒がしい一夜でした。少しでも足しに成らないものかと、風上側を頭で突っ張っていると、バッサバッサとテントが顔に幡めくものですから熟睡なんてとても出来ません。

10 時頃には漸く風も収まり晴れ上がってきましたが、出発するには遅く、睡眠不足もあって沈殿と決めます。幾組かのパーティーが通り過ぎていきました。此の様な地点での幕営が珍しいものと見えて、「ヒマラヤみたい」と冷やかしていくのも居りました。

カストールを越えてくる連中に「今日は何処まで」と尋ねると、何れも「クィンチノ・セラ小屋へ」と返ってきます。フェリクヨッホから小屋までは 1 時間もかからないとのことです。雪庇を気遣いながら、容易にイタリア側を見下ろせる位置まで出て行くと、丁度そこは主稜線からセラ小屋への下降分岐点です。なだらかにフェリク氷河下端に位置するセラ小屋とトレースがはっきりと見え、なるほど 1 時間もかかるまいと納得できる景観が眼下に広がっていました。

またさらに、小屋からの別のトレースがリス氷河に向かっており、クレヴァス帯のすぐ上流（リスカム南面岩壁帯の下方 200m付近）を大きく迂回して、リスヨッホやニフェッティ小屋へ通じるものと思われます。そのトレースを両方向に移動するパーティーが夫々数組有り、リスカムの稜線を避けた迂回路がかなりの人数を集めていることが伺えます。

一方、今日一日でカストールを西から越えて来たもの 7 組、セラ小屋から越えて行ったもの 1 組、同じく小屋からカストールを往復したもの一人を数えましたが、どのパーティーも小屋を利用している状況です。

セラ、ニフェッティ、マントヴァ、さらにはマルゲリータからモンテローザに至る一連の小屋は、リスカムやモンテローザに対する利用価値が極めて高いことを実感し、勉強不足を痛感したものです。

ところで、強風が未だ吹止まないうちに各所の小屋を出立した人たちが多いにも関わらず、リスカムには向かう者や、越えて来たものは誰も無く、トレースは全く有りません。

さて、我々の明日の行動を如何にすべきか。一抹の不安が掠めました。

トレースが無い時の東峰からの下りはシブイだろうなー。デュフールシュピッツェをショートカットして、グレンツ氷河を下るとしても一日遅れになる可能性は高く、昨日の天候を思えば皆に心配を掛けるだろうなー。

実力不足を棚に上げての結論は『西峯往復。出発地に戻る』でありました。

8月11日　晴

テント 7：05－9：00 リスカム西峯 9：20－10：35 昼食・撤収 12：15－14：30 ポリュックス南西岩稜末端 14：40－16：10 ブライトホルンパス 16：20－16：50 クライネマッターホルン駅

仄かに明るくなった 5：30。慌てて寝袋からはい出しテントの入口を開ける。赤く染まった雲に頂部をわずかに隠したテッシュやドムが美しい。

昨晩は風もなく、ぐっすり眠り込んでの大失敗。既に 2 組がテントの先をリスカムに向かっていました。大急ぎの朝食をとり、片付ける暇もなく出発した時には 5 番目です。

今朝はかなり冷え込んで、テントの内面が真っ白に凍りついていましたが、雪面もよくクラストして実に歩き易い。泊地からの出だしは雪の主稜線をほぼリッジ通しに進む。主稜線上に岩が現れてくる 4,200m付近から急激に傾斜を増してくると、トレースは岩の主稜線を離れ、支尾根に向かって左上してゆきます。支尾根が間もなく主稜線に吸収されると傾斜も落ち、やがて西峯頂上が足下となりました。

お互いの勇姿を残り僅かのフィルムに大急ぎで収め、新たに交換するべくザックに手を突っ込むが、フィルムが無いッ！　何で無いの？　前後の行動を反芻し、子細を思い出したところで何の役に立ちません。網膜にやきつけとこーっ。

北側は足下深く切れ込んだグレンツ氷河の向こうにモンテローザ氷河、ゴルナー氷河が遠く広がり、ミシャベルの山々に続く白と黒の世界が視野を支配するのに対し、南側は小さな氷河を介して、すぐそこまで暖かそうな緑の谷が近づいている印象を受けました。

東方は、グレンツ氷河の最奥部をモンテローザ山群が半円状に取り囲み、主峯のデュフールシュピッツェ南面には数本の側稜が、高度差 400mを黒々と際だたせています。西方はモンブラン山群が遠望でき、マッターホルンも折よく浮き出ていましたが、それから北に連なるマッタータール左岸の山々が雲の中。

展望を存分に楽しんだ後は、声をかけ合いながら慎重に降りにかかりました。支尾根付近は氷の上に雪を被った状態のところが多く気が抜けません。また 10 時頃になると雪が腐ってくるので尚更です。

テントに帰着すると直ちに撤収作業。嵐に対処して深く固めたペグの掘り起こしは実に難儀です。折れ曲がったポールが昨夜の風の強さを物語っています。設営同様に 1 時間もかかりフーフー吐息。4,000mオーバーの高度の影響を二人とも感じておりました。

今日は風が無く、カストールも容易に越えて先を急ぐ。

撤収に手間取り、最終ゴンドラ（17：05）には間に合わないかも、と危惧しながらの出発でしたがツヴィリングスヨッホまで来れば先が読めます。急げば間に合う。飛ばそう。

何時も追い抜かれている欧州人の、後続パーティーとの距離をほぼ保ち、遠く先行パーティーとの距離は僅かに縮まったかも。

往路では僅かながらも下方向に飛び越えたヴェラ氷河のクレヴァスが帰路には上向きとなって、ほんの僅かの落差にもかかわらず思わず慎重になってしまいます。

汗だくになってブライトホルンパスまで戻りました。あと30分。間もなく終了です

1 kmの頂稜をもつ大きなリスカムのほんの端っこに登れただけの今回でした。大きな楽しみが次回に残りました。

『デュフールシュピッツェに繋げる魅力的な縦走に、心も軽く荷も軽く、次回は小屋泊まりで行ってみましょう。いいでしょう？』

『そんなこと誰に言うてんねん。それよりも、次回、次回で、歳とらんよー。よう自戒せーよ。』

蛇足１　アルプスはテントよりも小屋

・荷物が相当に軽くなり、行動中のミスにも対処し易くなる。重荷では無理かも。

・相互の位置関係も小屋の利用のみで行動可能な山域が多い。

・小屋は、日本のそれよりも遙かに快適で、かつ安い。

蛇足２　ガイドレス

・必要条件

実力有るか。技術も、体力もやデー。

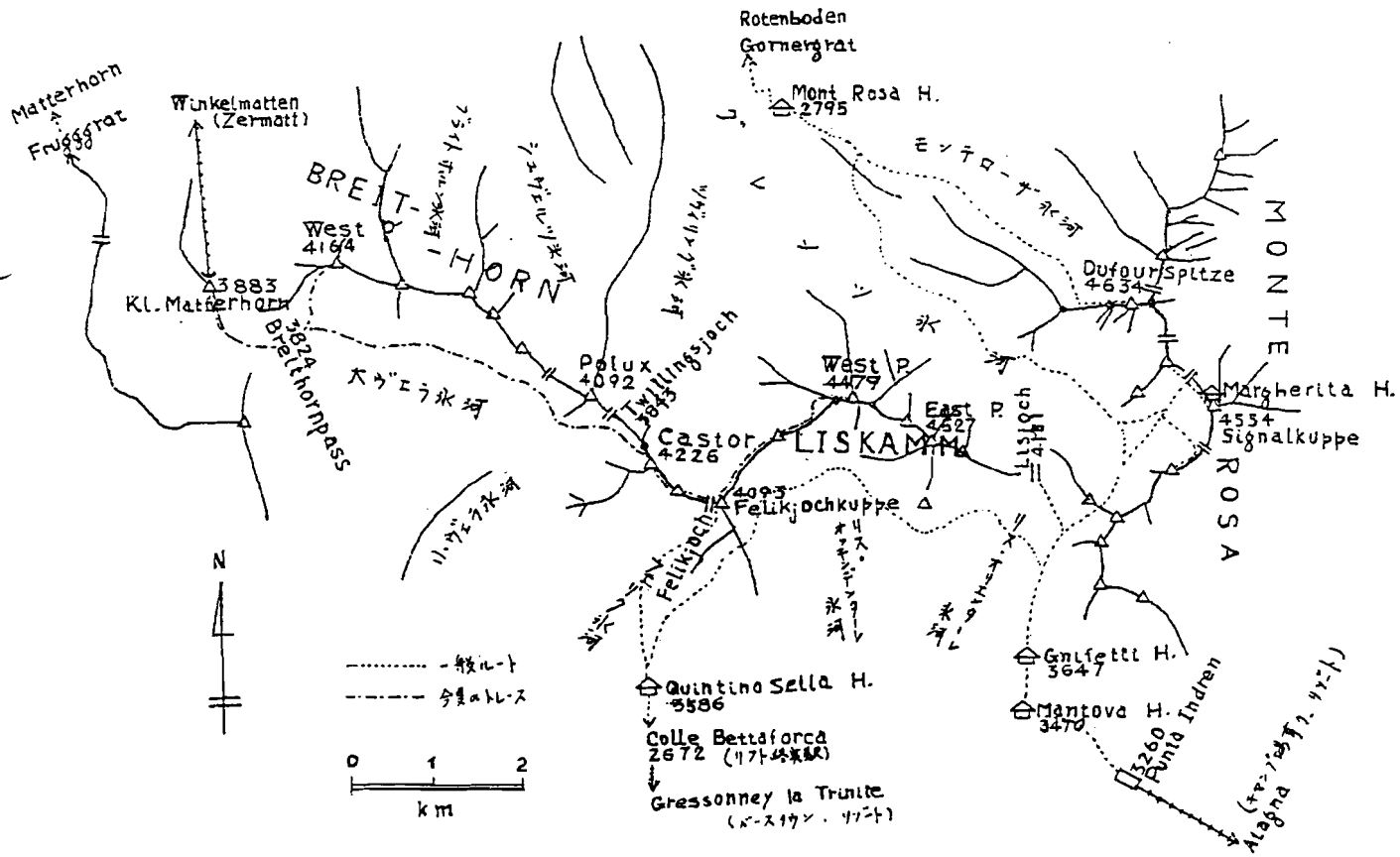
情報収集力有るか。色々判ってんのか。知ってんのか。

気力有るか。ちょっとやそっとでへこたれん気力やデー。

不足を実感してきました。スンマセン。ベンキョするてしおらしいこと言うてもあんまり先は無いんやデー。

・ガイドの効用は非常に大きく、ガイドレス登山に比べ、対象の選択範囲は格段に広く、時間効果も大きくなることは確かです。

・「仲間達だけで登る」ことの楽しさや意味づけとの兼ね合いも含めて、判断に迷うところです。



ツエルマットの穴場コース

トリフト（TRIFT）の谷ーメッテルホルン（3,407m）

佐々木惣四郎

小笹先輩とリスカム西峰に登ったあと、次の憩い先を物色していたらテントパートナーの藤本先輩より、メッテルホルンを推薦された。幸いにして 8 月 12 日は一日雪びより（テント場は雨）で 2000m以上は雪化粧となった。

8 月 13 日 信じられないおいしさのミツコ夫人のバラ寿司を昼飯分まで納めて 7 時 30 分出発。トリフトの谷はガスで先はほとんど見えない。9 時頃、ガスの中から突然小屋が姿を現しビックリ。ここからの登りはこれまでの急な坂と一転して草原とお花のあぜ道である。

ようやく周りの景色が望める様になったがまだスッキリしない。しかし、昨日の雪で山は白く輝き、草原には多くの花が咲き乱れ思いがけない風景に、興奮気味の有様！ 2,500mぐらいより雪道となり稜線手前のガラ場は歩き難い。10—15cm の雪であり、テント場 1,600m より 4 時間かかり 3,400mの稜線コルに達した。

コルのすぐ右にピークがあり、50m程のぼるが、すぐ後にきた 2 人パーティーはコルより雪渓におり 姿が見えなくなったのであとを追う事にした。150mぐらいですぐピークが前にあらわれ 12 時 30 分ピーク。残念ながらガスで見えず。しかし、ピーク手前の積雪 30cm ぐらいの広い雪原で素晴らしい天気になり、バイスホルンが貫禄のある美しさを充分に堪能。マッターホルン、モンテローザ等主なる峰峰は皆姿あらわし、藤本先輩のインスタントカメラに収めた。

下り始めたら約 10 パーティーぐらいと行き違ったがやはり距離が長い為か穴場コースの割りには人が少なすぎる。下りにやっと草原の景色が現れたが立山の弥陀が原を広くより美しく花で飾られた感じ！ 恐らくこの谷はツエルマットで ベストの花コースと思う。トリフト小屋迄下るとかなりの人が登ってきていた。4 時 PM ツエルマット着。

今回の合宿は ミツコメインシェフ、フミコサブシェフのお陰で HOTEL では口に出来ないメニューの連続でダイエットどころかグルメ旅となった。

＜名簿訂正＞

物故会員リストの訂正･加筆をお願いします。

入江　康行　　昭和 20 年ビルマ
粟飯原健三　　昭和 60 年 4 月
小川　英一　　昭和 61 年 6 月
福田　隆一　　昭和 58 年 10 月 19 日
松村　健一　　昭和 62 年 5 月 4 月
西島　宏一（昭和 11 年高商卒）昭和 13 年 9 月 18 日　中支で戦死
近藤　栄　　昭和 11 年 7 月　剣岳の剣尾根で遭難死
神吉　仁作　　平成 10 年 12 月

住所訂正

尾形睦・尾形達也
〒554-0012　大阪市此花区西九条 5-3-30-604

「雲ノ平、夢ノ平」　西村正男

日　時：7月21日（水）～16日（月）
コース：大阪～富山～折立～太郎平～雲ノ平～高天原～鷲羽岳～水晶岳～野口五郎岳～竹村新道～湯俣温泉～高瀬ダム～信濃大町～名古屋～大阪
メンバー：　西村（ザック重量23ｋｇ）、　なつみ（妻）（13ｋｇ）
宿泊、食事：山小屋素泊まり、３食自炊
行動結果：

＜1日目＞7月21日（水）曇り、22日（木）曇り
大阪難波(23：00)～(5：00)富山駅(5：40)～(6：25)有峰口～(8：15)折立(8：30)～(10：30) 1,871m三角点(10：45)～(13：20)太郎平小屋(TS1)
* 広々としたよい小屋。眺望よし。自炊部屋あり。水豊富。
* 素泊まり、5,400円。3食付、8,800円。
* 高天原小屋と経営同じ。

＜2日目＞7月23日（金）うす曇り
TS1(5：40)～(8：10)薬師沢小屋(8：30)～(10：30)雲ノ平、アラスカ庭園(10：55)～(12：45)アルプス庭園～(13：20)雲ノ平小屋(TS2)
* 公表より狭い。自炊設備なし。水は豊富。場所は最高。
* 素泊まり、5,700円。3食付、9,200円。
* 水晶小屋と経営同じ。水晶小屋は収容20名程度。避難小屋を営業小屋として使用している感じ。

＜3日目＞7月24日（土）曇り後晴れ
TS2(6：00)～(8：10)高天原峠～(9：25)高天原～(9：35)高天原山荘(TS3)
* 山荘より北1km に露天風呂あり。「からまつの湯」無料。
* 混浴、女性専用、ぬるめ湯の3つあり。いずれも最高。
* 露天風呂北500mに「夢ノ平」竜晶池あり。絶景の地。
* 小屋の場所は水晶岳の北東直下。場所よし。整備された小屋。
* 宿泊料金は太郎平小屋と同じ。水豊富。炊事場、外にあり。

＜4日目＞7月25日（日）曇り一時小雨
TS3(5：20)～(8：20)岩苔乗越～ワレモ分岐(8：40)～(9：25)鷲羽岳(9：45)～(10：15)ワレモ岳～(11：15)水晶小屋(11：30)～(12：05) 水晶岳、南峰、北峰(12：30)～(13：00)水晶小屋～(16：00) 野口五郎小屋(TS4)
* 整備された美しい小屋。眺望抜群。2畳の小部屋あり。
* 自炊部屋完備。宿泊料金は太郎平小屋と同じ。水 1L 200円。

＜5日目＞7月26日（月）曇り後晴れ
TS4(4：40)～(5：00)野口五郎岳(5：35)～(6：30)南真砂岳(6：40)～(8：00)湯俣岳～(10：00)晴嵐荘(10：50)～(13：35)高瀬ダム(14：15)信濃大町(15：06)～(18：09)名古屋(18：30)～(20：50)大阪鶴橋
* 晴嵐荘には自然の露天風呂あり。入浴料、500円

（西村記）

この度の山行で特に心に残ったのは高山植物が至る所で見られたこと。そして、天候に恵まれ、山の景色を十分に楽しめたことである。最初の折立登山口から2時間も登れば、ニッコウキスゲの群生、そして、池塘があり、数々の花たちが私達を歓迎してくれる。太郎平小屋の裏にはキンポウゲの群落。翌日、薬師沢に下る道にはツガザクラ、コイワカガミ、チングルマ、ハクサンイチゲヨツバシオガマ、シナノキンバイ、キヌガサソウなどなど…。

黒部の源流、薬師沢からの樹林の中、苔むした大きな岩ばかりの、急な登りを4時間、急に目の前が開け、木道になると、そこはもう雲ノ平。薬師岳、水晶岳、そして野口五郎岳などの山々に囲まれ、ハイマツとお花畑が一面に広がる楽園である。人気はなく、鳥の声すらもほとんどない。せせらぎのかすかな水音。風も優しく、ふとかがんで周りを見渡せば花にうずもれて、この自然の中に吸い込まれそう。なんて幸せな気分なのだろう。別世界にいるようで、いつまでもここにいたくなる。広い広い雲ノ平の見所を各国の庭園に見立てて名前が付いている。まず、アラスカ庭園は周りの山々の勇姿を十分に眺めることができる。日本庭園は湿原で、小川を挟んで岩やハイマツそして高山植物の咲き競う見事なお花畑。祖母山の登るとそこはアルプス庭園。笠ケ岳がハイマツの向こうにやさしく姿を見せている。雲ノ平山荘の周辺はギリシャ庭園。花のそばから雷鳥の親子が現れる。その奥がスイス庭園。それとキャンプ地もある。
とにかく、どこもここも花、花、花。こんなに素晴らしく、広いお花畑は今まで見たことがない

離れがたい思いを残して雲ノ平から次なる秘境、高天原へ向かう。その一番奥にある夢ノ平へ。ここでもニッコウキスゲが群生だ。竜晶池は神秘的で湖面に水草が茂り、あたりは静寂に包まれている。樹林の向こうに赤牛岳が横たわり、白雲が流れていった。ひっそりとハクサンシャクナゲが咲いている。露天風呂のからまつの湯は乳白色で川の音を聞きながら、ゆったりと旅の疲れを癒すことが出来た。

入山して 4 日目。鷲羽岳、水晶岳登頂。ワリモ岳頂上からは通ってきた雲ノ平がすべて見渡せる。周りの山々には雪渓がまだらに残り、山の緑に映えている。そして、雲ノ平が日本アルプスの盆地のようになっているのが本当によく分かる。なんと雄大な景色だろう。

野口五郎小屋からの眺めも素晴らしい。北アルプスから、八ケ岳、富士山、南アルプスなどの山々。夕方には虹がかかり、夜明け前にはそのシルエットが幻想的に浮かび上がる。頂上に登るとあの天を突く槍ガ岳がくっきりと朝日を受けてそびえていた。ここで、笠ガ岳、鷲羽岳などにも別れを告げる。やがて、下山路は竹村新道。最後まで槍ガ岳は名残惜しそうに私たちを見送ってくれた。足元にははじめてみるハクサンチドリが可憐に咲いていた。

旅の終りは晴嵐荘の露天風呂で気分も爽快。この5日間のアルプス秘境の旅は私達にとって大変楽しく思い出深いものとなり、同時に偉大な自然からの恩恵に感謝しています。　　（なつみ記）

1999 年春山報告ー雪黒部単独行ー　和田城志

まったく山は静かだった。入山から下山まで人影は皆無、足跡さえ無かった。広大な北アルプスの真っ只中を独り占めして、こころ豊かなひとときに酔った。やっぱ、山はいい。

3 月 13 日　晴　自宅出発（5：40）ー大阪発（7：12）ー富山ー立山駅発（12：00）ー鬼ヶ城出合上（16：30）

昨晩は見送りに来た妻と友人とで飲み過ぎて、「きたぐに」に乗り遅れてしまい、翌朝の始発特急で出発する羽目になった。なんとなく気乗りしない出発、朝からビールを飲みたい気分だ。

立山駅から立山砂防軌道に入る。8 年前にこのコースから五色ヶ原、平の渡し、南沢岳と黒部を横断したが、その時と比べると積雪は多く、ワカンを付けての出発となる。軌道上は斜めの雪面となり歩きにくいし、河原にトレースも見えるので、常願寺川河原に降りることにした。トレースは地元の釣り人のものだった。足跡は鬼ヶ城谷の手前で引っ返していた。鬼ヶ城谷の出合には工事事務所があり、クレーンやタンクローリーが雪に埋まっている。しばらく行くと谷が少し狭くなり、堰堤が谷をふさいでいる。再び軌道を歩かねばならないか。底雪崩のデブリを避けて、安全そうな河原に天幕を設営した。

14 日　晴　出発（5：20）ー真川、湯川谷合流点（7：10）ー林道（9：10）ースゴ谷出合（10：40）ー薬師岳北西尾根取り付き（11：30）ー1645m（15：00）

泊まり場より再びスイッチバックしている軌道へ戻り、斜面をトラバースして行く。やはり歩きづらい。軌道幅は 2m程だから、山の傾斜がそのまま雪傾斜になって、急な崖の所などはスリップの危険がある。砂防工事事務所のある水谷出合でまた河原に降りる。真川と湯川谷の合流点だ。これより尾根に取り付くが、途中に崩れたナイフリッジがあり、また少し湯川谷へ迂回下降しなければならなかった。2 時間かかって有峰への林道に這い上

がった。計画では旧立山温泉経由の道筋を予定していたから、これでも 1 時間ほどの短縮になっただろう。林道道幅は 5m程あるが、所々雪崩に埋められて斜面になっているところがあった。

強い日差しに焼かれながら林道を行く。ワカンは足首ほどしかもぐらず、快適な雪道だ。スゴ谷の出合付近は開けた谷で、かつて真川の集落があった。四方を山に囲まれ雪に閉ざされた山里、どのような生活を営んでいたのだろうか。今は発電用取水口と錆びついた生コンプラントが寂しく雪に埋もれているだけだ。

スゴ谷出合の看板に立山カルデラの関係年表があった。1858 年（安政 5 年）大地震、鳶山大崩壊、立山温泉埋没。明治 39 年、立山砂防工事始まる。昭和 3 年、内務省工事事務所開設、温泉全盛期。昭和 44 年、集中豪雨、常願寺川大水害、温泉廃れる、とあった。そう言えば、昭和の初期に、強制連行ではないが、たくさんの朝鮮人労働者が働いていたという記事を読んだことがある。春に黒部、針ノ木を越えて逃亡したとあった。過酷な労働であったに違いない。内務省という名称がなんとなくきな臭い。腐った雪、重いザックにふらふらになって尾根に取り付く。薬師岳から北西に伸びた顕著な尾根で、中ほどに丸山（1905m）が名前どおりの姿で座っている。樹林帯の急登をひたすらラッセルに励んで、本格的にバテた午後 3 時、1645m地点で行動を打ち切った。

15 日　雨後雪　沈殿日

東シナ海に前線をともなった発達中の低気圧 1008hp があり、朝には九州正午には岡山と移動、998hp と発達し、全国的に悪天候にみまわれた。未明より雨がテントを打ち始めたが、午前中は小降りで行動できないことはなかったから、少し後悔した。正午より雨脚が強くなり、風も出てきた。

終日、三木清を読んだ。読書に飽きては、天気図を書き、紅茶をすすり、雨に煙る雪山を眺めた。一日というのはこんなにも短いものなのか。

16 日　雪後快晴　出発（5：30）－丸山（7：20）－2157m（9：50）－主稜線（13：10）－薬師岳（14：30）－東南尾根 2301m付近（17：10）

独りで登ると、どうも頑張り過ぎる。ただ高みへ、単純明快な一日だった。山が嗤い、僕がむきになる。そうして疲労が体の中に充満して微熱を発するようになると、山に受け入れられた気になる。

テントを打つ雨音がしなくなったのは夜中過ぎだった。低気圧は三陸沖に抜け、気温が下がり、雪に変わったようだ。冬なら西高東低の豪雪になるところだが、春はすぐに移動性高気圧となり、回復は間違いない。小雪の舞う薄明かりの中出発、膝下のラッセルであっさり丸山に着く。折から雲が切れ、正面に薬師岳の威容が広がる。なだらかな山だと思っていたが、実に堂々たる山容だ。北風が強く、雪煙がたなびくさまはヒマラヤのようだ。

雪質は最良、高度を上げるに従って、ますます歩き易くなり、2200m付近でアイゼンに履き替える。樹林帯を抜けると、尾根は斜面状となり、主稜線へ急登となる。すぐ近くに見えるのだが、なかなか近づかない。アイゼンワークで足首に疲れを感じ始めたころ、北薬師寄りの稜線に飛び出る。雪庇が大きく張り出した広い尾根筋だ薬師岳へ小一時間で着く。黒部の谷は春霞、有峰ダムも一部湖面が解け始めて、青緑の水面をのぞかせている。北風を避けて、頂上社の元で大の字になって大休止、春の日差しがじりじりと肌に突き刺さる。何度見てきただろうか北アルプスの山並み、青、白、黒が曖色のベールに包まれて平安を形作る。

さあ、下降だ。避難小屋から東南尾根に入る。かつて愛知学院大学の大量遭難があった尾根だ。なだらかなただ広い尾根で、雪が風に吹き飛ばされ地肌が見えている所もある。黒部側に巨大な雪庇が張り出し、遺松帯とのコンタクトに亀裂が走っており、それに沿って慎重に下る。2650mからの急下降は南東面の日だまりになり、雪が解けて遺松の斜面になっている。その中を下っていくと、足元より雷鳥が飛び出してきた。おるわおるわ、真っ白い雷鳥が十数羽足元をうろつく。彼らのコロニーに迷い込んでしまったようだ。まったく怖がる様子はないが、こちらも気を使って、ゆっくり脅かさないように下った。こんなにたくさんの集団を見たのは初めてだ。たいていはつがいか子連れのファミリーなのに、雪一色の世界にぽつんとできた小さな緑のオアシス、縄張りが接近して集団のようになっているだけかも知れない。

2300mの樹林帯まで下って、やっといいテント地を見つけた。今日はよく歩いた。火照った身体に夕闇の冷気が快い。泡のように星が沸き出てくると、シュンシュンと雪の囁きが聞こえるようになり、黒部の谷々は深い藍色の静寂に包まれる。三日月の光量は淡く、早春の星座は冴え冴えとして瞬きを惜しまない。星空の神秘、雪渓谷の静謐、そして人の不思議、ありふれた、しかしいつまでも僕らの心を捕らえて離さない大自然の美観があった。感傷が込み上げてくるのを止められなかった。

17 日　快晴後薄曇　出発（5：30）－薬師沢出合（6：50）－雲の平山荘（10：40）－岩苔乗越（12：30）－水晶小屋（13：30）－東沢乗越（14：30）－真砂岳のコル（15：50）

寒さに目覚めたのは 2 時、昨夕オリオンのあった位置に大熊座がある。余り気味の燃料にコンロを点け、もう一寝入り。疲れは重く、すぐに深い眠りに落ちた。4 時起床、もちラーメン、コーヒー。手慣れたテント撤収も、カチンカチンに凍ったペグを掘り起こすのに手間取った。

東南尾根はなだらかで樹林帯に入ると方向が分かりにくい。視界が悪いと苦労しそうだ。正面に黒部五郎岳を目指してやや左寄りを心がけて下ればいいだろう。薬師沢出合の小屋は 2mほどの雪帽子を被り、吊り橋も重たそうに雪をのせている。すぐ下に亀裂の走ったスノーブリッジがあり難無く横断、黒部は雪解けの雫を集め、やわらかに春を歌う。戦時中の田園詩人、竹村俊郎の詩を思い出した。

春来

戦えど小川の水（みもい）　かくも清（さや）かくも清清（さやさや）
ひたひたに岸漲らひ　声高く春を謳いつ

戦えど春浅き山　かくも静（しづ）かくも静静（しづしづ）
白妙のみ雪かがふり　豊けくぞ春日浴みにつ

かくも清かくも清清　かくも静かくも静静
川に聞く神代の響　山に知る太古の沈黙（しじま）

滝谷や八甲田山で軍事訓練した話は有名だが、雪の山はこの詩のように厭戦的雰囲気の方が似合う。

よくしまった雪面をワカンで急登、2 ピッチで雲の平の西端に上り着いた。正真正銘、北アルプスの真っ只中。正面に岩肌を黒々と剥き出した水晶岳、右前方鷲羽岳越しに槍穂高の岩塊、遠く左後方に立山連峰の白い山並み、快晴微風、大雪原に一条のトレールを刻み、身も心も真っ白になって歩く。

祖父岳手前でアイゼンに履き替える。順調に進んではいるが、身体の芯に疲労が居座っていて、活力が湧いてこない。競わず焦らず、ゆっくりとしたペースでただひたすら歩いた。主稜線に出ると、ラッセルは全くなく、夏道沿いに歩ける。ただ、水晶岳からの下りは少し痩せていて気を使った。この稜線は 10 年前の正月、登山再開の山行として、パートナー岡本のリードで登った。猛吹雪の中、右膝をかばいながら、ザイルにしがみつき辿った記憶がある。

真砂岳手前の吹きざらしのコルにブロックを積んでテントサイトとした。槍の穂先を隠していた雲も日没と共に晴れ上がり、薬師岳の背後は血のような夕焼けに染まった。

18 日　快晴　出発（5：30）－野口五郎岳（6：30）－三ッ岳（8：00）－烏帽子小屋（9：30）－高瀬ダム（13：00）－七倉（14：30）－葛温泉－信濃大町－帰阪

2800mは春とはいえ寒い。4 時前に起き出して外をうかがえば、満天の星、まことに未明の星空ほど心にしみるものはない。テントから半身を出し、寒さを忘れて見とれた。天文学や物理学がいかに発達しようとも、ビッグバンも 150 億光年もダークマターも、つまりは子供のないしょ話のようだ。星々の無防備というか寛容というか、すべての生き物にとって無条件に心を許せる存在はかけがえのないもので、不可知論の方が似合っている。

さあ下山だ。上り下りの少ない丸い尾根は夏道が露出し、アイゼンが気持ち良くささる。夏よりも速いコースタイムで歩いて、あっさりと烏帽子小屋へ着く。ブナタテ尾根を下ると、強い西風が遮られ、春の陽気に包まれる。期待したトレースはついに無かった。ザラメ雪が重たくワカンにからんで、急な樹林帯のラッセルに苦しめられた。所々に残された色褪せたリードに導かれ、ルートを誤ることなく登山口に降り立った。

よく頑張ったというべきだろう。高瀬ダムの湖面は深い青緑色をたたえ、南中した陽の光が反射している。ときおり稜線の冷気が吹き降りてきて、さざ波が立ち、輝きが走る。山登りの快楽がいつもの顔でやってくる。葛温泉の湯煙までもう一歩き、そこにもきっと無人の湯船が待っているだろう。

（あとがき）

異様に日焼けた顔に温泉の湯が快く滲みた。平日の昼過ぎでは食べ物屋は皆準備中の看板、仕方なく大町駅のホームのベンチで、後立山の山並みを眺めながら、そばとビールで完走を祝した。フーッ極楽極楽。

ところが汽車に乗ってがっくり、松本駅まで女子高生の携帯電話、特急「しなの」でおばはんツアーのお喋り、最後は新幹線で営業マンの雑談、「るせーっ！ええ加減にせえ」とおもわず怒鳴りそうになった。たった 6 日間とはいえ、声を選ぶ権利があったし、山の音という音には品があって、神経がわがままになっていたのだろう。
修養の至らないことは認めるが、どうも日常の街生活に対してこらえ性がない。

一つ気づいたことがある。ノイズとは、意味のない音のことではなくて、わたしにとって無価値な言葉を指す、ということだ。自然の音こそ声であって、控えめな聞き上手の語り手といえる。反対に街の声はただの雑音で、聞き下手の自己主張の応酬といっていい。言語は表情や意味を伴うから決してＢＧＭにはならないし、無意識に感情移入してしまって雑音への参加を強制させられる。ましてや狭い汽車の中や居酒屋で隣り合っては避けようがない。二人以上の集団はそれだけで暴力を孕む。

自然の声には秩序と連続がある。渓の音、風の音、雪の音、光の音、それらは単一では声にならない。光と雪が、水と岩が、風と木々が和合して初めて声になる。つまり寝物語りが基調であって、自己主張のはいる余地はないのだ。山の声は擬人化の不要な一つの交響詩である。

そういう意味で、山の中の沈黙は山との交歓において極めて快活であり、街の中の饒舌は社会に対する自己防御において極めて孤独である。山と19いう労苦と危険に満ちた厳しい自然環境は、孤独について考えやすい場所ではあるが、決して孤独にはならない。木曜日午後９時、ビジネスマンで満席の新幹線の中でしみじみと孤立を感じた。下りてきたばかりなのにもう山に帰りたくなった。

インターネットでヤン坊マー坊天気予報を見ていていると、1959 年当時のキャラクターが載っていました。天気予報も 40 周年だそうです

編集後記

・今号も原稿がたくさん集まり、ボリュームのあるものになりました。しかも、ほとんどの方に原稿を短くしてください！と再度お願いするはめに。たくさん書いてくださるのはとてもうれしいのですが、やはり多くの方に書いていただきたいので、無制限というわけにはいきません。できればこの紙面で１～2 頁に収まるくらいでお願いします。そして、情報は簡潔に、また、メリハリをつけてお願いします。

・田中 Dr.のコラムいかがでしたか。ときどき書いてくださるとのことですので、ご期待くださいね。質問なども受け付けます。　【む】

市大山岳会ニュース　　大阪市立大学山岳会発行　　会長：池永薫爾　　編集：矢倉　睦

1999.9.28

会員・賛助会員　各位

運営委員会　総括　佐々木惣四郎

大阪市立大学山岳会　駒ケ根山荘　ヒュッテ雪線（山荘便り　その7）

冬のシーズンも間近となりました。ヒュッテ雪線もこの春夏は大勢の方のご利用を頂き、この半年で既に去年一年間の利用実績を上回っております。ただ残念ながらこの 4 月に凍結事故が起こり 51,000 円の修理代が発生致しました。ご報告させて頂き、ご利用に当たっての注意を促したいと思います。

尚、質問、ご意見ご要望等は遠慮無くお近くの運営委員に持ちかけて頂きたく。

1.凍結事故概要

状況；4/25 白馬主稜登攀後、山荘に戻りシャワーを浴びようとしたメンバーが風呂場の蛇口を開けた所、蛇口混合栓より激しい水漏れ。

原因；水抜きの不十分。おそらく 3 月迄の冷え込みで、混合栓が凍結破裂していた考えられる。これまでも、水抜きは行っていたが、不十分で、混合栓とシャワーの間に溜まった水が凍結したと推定。尚、風呂場は殆ど使用してこなかったので発見が遅れたと考えられる。

不十分な水抜き；これまでは、「元栓を締めて、水抜き栓＝ボールバルブを開ける」で終わっており、その後室内の全ての蛇口を開けて水を完全に抜く事をしてこなかった。

2.対策＝完全な水抜き

室外の瞬間湯沸かし器の真下地面にある水道「元栓」を閉める。同湯沸かし器の左下にでてる水抜きパイプの栓＝ボールバルブを開ける。室内に戻り、台所・洗面所・風呂の蛇口を開ける。これで完了。到着時はこの逆をして下さい。尚、到着時室内の蛇口を閉めずに、先に元栓を開けると、室内が水浸しになりますので要注意。

3.その他使用の際のお願い

・石油ストーブ…一日中点けぱなし（就寝中も）位で、布団も乾燥してベターです。
　灯油は地下室にあり、空になってれば、購入しておいて下さい。
　代金は立て替え、会計に後日請求下さい。

・風呂　…帰るまでに乾燥させる余裕のある方は使用して下さい。

・炊飯器、ポット、コーヒメーカ、オーブンの電源…流しの左上より蛸足。帰る時には抜いて下さい。

・ゴミの始末　…駒ヶ根市より分別廃棄の指導を受けてますが、面倒ですので持ち帰って処分した方が良いでしょう。